博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	飛田　康裕
論 文 題 目	説一切有部における三世実有論の形成 ――『阿毘達磨識身足論』の分析を中心に――

インドにおける仏教哲学は諸部派における諸教説の体系化を嚆矢とすると言えるであろう。本論文は、インドの諸部派の中で最も勢力のあった説一切有部（以下、有部と略す）によって体系化された教義の一つである三世実有論を解明している。三世実有論とは、「諸行（諸条件によって作られたもの）は、過去と未来と現在において、実有として、存在する」という説である。有部はこれを定説とする。しかし、常識的に見てこの説には問題があることは容易に理解され得る。何故ならば、三世実有論により「諸行は恒常に存在する」と見なすならば、仏教を特徴づける根本的な教説である四法印の一つである「諸行無常」という考えと矛盾することになるからである。有部も当然このような矛盾の可能性に気付いていたはずである。それでは、有部は、如何なる動機から敢えて三世実有論を導入したのか。本論は、この動機の解明を目的とする。

本論は、第一部の三世実有論の論究と第二部のテキストと翻訳から構成される。第二部は、第一部の論究の資料となる『阿毘達磨識身足論』「目乾連蘊」のテキストと和訳である。第一部の第一章においては、本論の考察の中心となる『識身足論』「目乾連蘊」に見られるすべての三世実有論証を分析している。即ち、仏教論理学の諸概念を用いて、それらの論証の論証因を整理し、論証の基本的なパターンを抽出している。このような論理的に明確な形での三世実有論証の分析は、これまでの研究には見られないものであり、本論文の成果である。

第二章においては、「[過去かつ未来の事物は] 観察されるがゆえに存在する」という三世実有を直接的に証明する論証での「観察されるがゆえに」という論証因の妥当性を文献的に吟味する。考察の結果として、この論証からは、あらゆるありのままの観察を「個別のあり方で存在する対象を原因として生ずる知」という一事をもって規定しようとする有部の意図、つまり、「個別のあり方で存在する対象を原因として生ずる知」という規定をありのままの観察の公理にしようとする有部の意図が、三世実有論導入の動機の一つとして考えられることを明らかにしている。なお、この第二章で示された、三世実有論証において意図されている観察とは、単なる表象でもなく、また、それでないものをそれであると仮説することでもない。それは、解脱や涅槃に必要不可欠なありのままの観察である。

第三章と第四章においては、それぞれ、三世実有論を認めない場合には、二心和合という誤謬に陥ること、そして、異熟因果同時という誤謬に陥ることを論理的に解明している。そして、これら誤謬を導く論証が「従来の研究の如く三世実有論導入の動機となること」は有り得ないという帰結を明確に示している。なお、論証の過程の説明の一部には若干の補正が必要であるが、それは、論述を構成する論理に直接関係しないので、本章での帰結を導く論述に障礙となるものではない。

第五章のおいては、「[過去あるいは未来の事物が] 釈尊によって説かれているがゆえに」という、条件が整いさえすれば直接的に三世実有を証明しうるものとなる論証因を吟味する。それにより、この論証においては、「過去あるいは未来の事物は、釈尊によってありのままに説かれているがゆえに、ありのままに知られ、ありのままに知られるがゆえに、個別のあり方をするものとして存在する」と解釈することの可能性を示している。即ち、「釈尊によって説かれているがゆえに」という理由は、従来、単に、信頼される人の言葉という権威に依存した根拠として扱われるに過ぎなかったが、本論においは、その権威を、第二章において提示したありのままの観察との関係から捉え直すことが可能である、という視点を導入している。

以上からすると、三世実有論導入の動機は、「個別のあり方で存在する対象を原因として生ずる知」という規定をありのままの観察の公理にしようとする有部の意図であるということとなる。ただし、以上の論証における論理的包摂関係に関しては、「任意のものが［ありのままに］観察される場合には、その任意のものは［個別のあり方をするものとして］存在する」という事柄を無批判のままで利用していた有部が、対論者からの反論を受けた後で、「《実際に存在する》所縁（認識対象）という原因から心（認識主体）という結果が生ずる。よって、心（認識主体）という結果がある場合には、必ず、《実際に存在する》所縁（認識対象）という原因がある」というかたちで論理的包摂関係を捉え直した経緯が窺える。これが、本論第七章における考察内容である。

上記の考察の結果として、三世実有論導入の動機は、解脱や涅槃に必要不可欠なあらゆるありのままの観察を「個別のあり方で存在するものを対象とする知」という一事をもって規定しようと意図したことにある、という結論を提示している。

なお、第七章を以って、三世実有論導入の動機についての考察は終わるが、本論第五章の考察から、有部は、認識対象と認識と言葉との間に因果関係を想定していることが明らかとなった。第八章においては、この因果関係を後世の論書に基づいて吟味している。そして、この因果関係の解釈に「言葉を説く者の観点と言葉を聞く者の観点」が加味されるようになったことを指摘している。

このように最初期の三世実有論証の理論的な枠組みを仏教論理学の思考方法を駆使して解明した本論文は、博士（文学）の学位授与に値するものと判断する。

公開審査会開催日	2013 年 5 月 31 日		
審査委員資格	所属機関名称･資格	博士学位名称	氏 名
主任審査委員	早稲田大学 教授	Dr. Phil.（ハンブルク大学）	岩田 孝
審査委員	早稲田大学 教授	博士(文学)早大	大久保 良峻
審査委員	駒澤大学 教授		池田練太郎
審査委員			
審査委員			